

# News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

## 森と水の源流館×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウム 第 22 回共生科学研究センターシンポジウム / 第 26 回紀伊半島研究会シンポジウム 「樹と水と人の共生を未来へつなぐ 一源流学教室」報告【酒井 敦】

本研究所では、11月23日（水・祝）13:00～16:30に、奈良県川上村の公益財団法人吉野紀の川源流物語村 森と水の源流館、大和・紀伊半島学研究所、共生科学研究センター及び紀伊半島研究会との共催で「樹と水と人の共生を未来へつなぐ 一源流学教室」と題するシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは奈良県川上村・川上村教育委員会の協力を得て、「森と水の源流館」設立20周年記念特別企画、大和・紀伊半島学研究所の地域連携シンポジウム、第22回共生科学研究センターシンポジウム、そして第26回紀伊半島学研究会シンポジウムと、多様な位置づけをもっ



川上村会場の様子

て、川上村総合センターやまぶきホールを主会場、奈良女子大学コラボレーションセンター Z307 教室と東吉野村にある大和・紀伊半島学研究所分室をサテライト会場として、3会場を Zoom でつなぐハイブリッド形式で行われたほか、森と水の源流館公式チャンネルを通じて YouTube でもオンライン配信されました。

川上村は紀伊半島の中部に位置し、栄養に富む土壌や豊かな降水量など恵まれた自然環境のもと、古くから吉野林業の中心地として繁栄してきました。また、吉野川／紀の川の源流地帯にあたり、紀伊半島の広い範囲に水や豊かな海の恵みをもたらす「水源の村」でもあります。さらに、最近では「大台ヶ原・大峰山・大杉谷ユネスコエコパーク」の一部として、「豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進めるモデル地域」としても、川上村の存在意義やそこでの取り組みの重要性は国際的にも広く認知されるようになってきております。

本シンポジウムでは、吉野林業やユネスコエコパーク、生態系サービスや環境教育、ダム建設を契機として作成さ

### TOPICS

- ・ 森と水の源流館×大和・紀伊半島学研究所  
連携シンポジウム  
第 22 回共生科学研究センターシンポジウム /  
第 26 回紀伊半島研究会シンポジウム報告
- ・ 大和・紀伊半島学研究所長の挨拶
- ・ なら学研究センターの活動について（なら）
- ・ 共同研究の紹介（なら）
- ・ なら学研究会活動報告（なら）
- ・ 共生科学研究センター 施設・機器の  
共同利用案内（共生）
- ・ 2022 年度 野外体験実習報告（共生）
- ・ 第 18 回若手研究者支援プログラムの報告（古代）
- ・ 再開しつつある国際的共同研究（古代）
- ・ 2021 年度聖地学シンポジウムの報告（古代）

れ今日のSDGs時代を先取りした形となった「川上宣言」などについての紹介が行われ、川上村で実践されてきた「樹と水と人の共生」の過去、現在、未来について考える機会が提供されました。具体的には、冒頭の栗山忠明氏（川上村長）による開会の挨拶に続き、泉英二氏（愛媛大学名誉教授）による「吉野林業—森林と人間のかかわりの極致」と題する基調講演が行われ、次に横田岳人氏（竜谷大学先端理工学部）による「川上村・水源地の森の自然環境」に関する講演が行われました。これら二件の講演に対し、主会場の谷茂則氏（谷林業株式会社）、および奈良女子大学・東吉野村サテライト会場の高田将志氏・酒井敦氏（奈良女子大学）らからのコメントや質問を受け付けたところで前半は終了となりました。休憩をはさんで開始された後半では、中澤静男氏（奈良教育大学）から「地域の自然と経済を活かせる人づくり」、宮口侗迪氏（早稲田大学名誉教授）から「川上宣言×SDGs シンポジウム『樹と水と人の共生を未来へつなぐ』に寄せて」と題する講演がありました。その後行われた全体質疑では、これからの吉野林業や川上村のあり方について、参加者と講演者との間で熱心な議論が展開されました。

このシンポジウムには主会場（川上村やまぶきホール）に65名、奈良女子大学会場に12名、東吉野村会場に4名の参加者がありました。また、You Tubeでの生配信の最大同時視聴数は41でした。シンポジウムの様子は、引き続き森と水の源流館公式チャンネルを通じてYou Tubeで視聴可能です。川上村をはじめとする吉野林業の歴史や水源地の意義、人と自然の関わりや環境教育についてご興味のある方は是非ご覧ください。



シンポジウム YouTube

### プログラム

- 開会挨拶 栗山 忠明（川上村長）
- 基調講演 「吉野林業—森林と人間のかかわりの極致」  
泉 英二（愛媛大学名誉教授、吉野林業研究家）
- 視点提供1 「川上村・水源地の森の自然環境」  
横田 岳人（龍谷大学先端理工学部准教授、公益財団法人吉野川紀の川源流物語理事）
- 基調講演・視点提供1 に対してのコメント  
高田 将志（奈良女子大学教授）  
酒井 敦（奈良女子大学 共生科学研究センター長）
- 視点提供2 「地域の自然と経済を活かせる人づくり」  
中澤 静男（奈良教育大学 ESD・SDGs センター長）
- 視点提供3 「川上宣言×SDGs シンポジウム『樹と水と人の共生を未来へつなぐ』に寄せて」  
宮口 侗迪（早稲田大学名誉教授、公益財団法人吉野川紀の川源流物語理事）
- 統括 寺岡 伸悟（奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所長）  
前迫 ゆり（大阪産業大学・紀伊半島研究会長）



東吉野村会場



奈良女子大学会場の様子

## 大和・紀伊半島学研究所長の挨拶【寺岡 伸悟】

大和・紀伊半島学研究所  
所長 寺岡 伸悟

令和4（2022）年度から、研究所所長を拝命しました。それまでは、研究所のなら学研究センター長をつとめており、研究所の立ち上げ時から保（たもつ）前所長のもとで活動してきました。ひとつのセンターを運営するだけでも自分の力量に余ると感じていたので、はるかに大きい共生科学研究センターや古代学・聖地学研究センターの皆さんが、これまで同様、あるいはそれ以上の活動環境を保てる運営をできるかと考えると、はなはだ心もとない、荷が重いというのが正直な心境です。

ただ、本研究所が創設され、これまで個々別々に活動してきた3つの研究組織が「一つ屋根の下」で同居するようになり、はや3年、前所長のご尽力もあって、互いに協力する気運が生まれ、自然・社会・歴史文化の専門家が一緒に実施するシンポジウムなど、それまででは考えられなかった活動が実現してきました。

またこうした活動は、地域の方々とともに企画・実施するシンポジウムであり、大学が一方的にその研究成果を報告するのではなく、地域の方のニーズや希望と、研究所の研究教育資源を編み上げるような行事です。これまで大淀町、東吉野村、下市町、川上村という吉野川流域の4自治体で実施しました。来年度は、はじめて奈良盆地内・大和川流域で開催することを、すでに地域の方々とは相談中です。

ここで「流域」という言葉を使いました。このタームは、研究所設立以来の共同活動のなかでようやく見えてきた、研究所設立時の問い＝ミッションを解く、我々なりの糸口ではないかと考えています。

本研究所の目的は、大和・紀伊半島の特殊性と普遍性／一般性を明らかにすること、というのが私の理解です。大和・紀伊半島には、共生科学が明らかにしてきたようなきわめて多様な生物と自然環境が存在しています。また、古代学・聖地学が明らかにしてきたような、記紀・万葉の時代以来の歴史文化と聖地の集積があります。さらに、なら学が明らかにしてきたような、都市から農山村にいたる、人智溢れる社会システムがあります。こうしたものが互いに深く関わり合って生み出され維持されてきたことを私たちは研究所の活動のなかで感じてきましたが、それをアカデミックに解き明かす糸口として〈流域〉という視点を得た次第です。河川は山と海をつなぎ、そこに流域という、多層的なつながりと循環からなる領域を形成します。

それは自然・歴史文化・社会の連関を生み出します。

大和・紀伊半島を、木津川・大和川・吉野川紀ノ川・熊野川・橿田川など、特徴的な河川流域が集積して成った場所として捉えれば、それは大和・紀伊半島の特殊性と（流域という）一般性の両方、さらに深い連関と地域性をもった学際性という、一見両立の難しそうな研究志向を包含することが可能となるでしょう。そしてそれは研究だけでなく、教育の場としても、近畿の人や大学だけでなく、国内外の多くの方にとって格好の場所となるに違いありません。

そこで令和4年度の後半に、3センター長で議論し、総合流域学という言葉、研究所のキーワードとして考案しました。幸い、研究所には、共生科学センターが長く教育研究の場としてきた吉野郡東吉野村の施設があります（研究所設立後、研究所の分室となっています）。また、令和4年度に法人統合した奈良教育大学も演習林や農場を所有しておられます。こうした施設を視野にいれながら、総合的な流域学を、研究と新しい学びの場として育てていくことを、研究所の重要なミッションとしていきたいと考えています。

もちろんこうした試みは、センタースタッフはもちろん、広く他大学、さらに地域の方々の協力なしに実を結ばせることはできないでしょう。より一層の皆様のご協力・助力をお願いしたいと思います。

## なら なら学研究センターの活動について【寺岡 伸悟】

令和4（2022）年度、なら学研究センターでは、研究・教育・地域連携の各分野で引き続き活動を続けてきました。

『月刊大和路ならら』には、『続・大学的奈良ガイド』発刊以後も、奈良に関する研究成果を発表しています。また協力研究員の方々も、多くの研究成果を発表してくださっています。

地域の公共団体との共同研究契約も堅調です。高取町社会福祉協議会、下北山村などと令和4年度も地域課題解決に関する共同研究を実施してきました。令和5年度はさらにその数が増加する予定です。

なら学研究会では、本学以外で奈良に関して優れた研究を行っておられる方々にその成果をご発表いただくことができました。そこから新たなつながりが生まれることが期待されます。

なら学研究センターとしてのシンポジウムは年度末（3月28日）に、奈良県地域振興部南部東部振興課、南都経済研究所、奈良県立大学地域創造研究センターとの共催で実施されました。テーマは、奥大和地域情報プラットフォームの構築です。吉野町中央公民館とオンラインのハイブリッドで開催されました。このシンポでのゲスト講演者は、島根県から招きました。島根県は地域振興、新たな社会づくりの先進地帯であるとなら学研究センターは考えています。引き続き、こうした連携活動を活性化していきたいと考えています。

## なら 共同研究の紹介【水垣 源太郎】

2022年度は2件の共同研究を実施しました。1つは、高取町社会福祉協議会との「地域住民のサポート・ネットワーク構築に向けたコミュニティ・リサーチ」、もう1つは下北山村との「下北山村におけるソーシャル・サポート・ネットワーク構築に向けたコミュニティ・リサーチ」です。いずれも2021年度から継続している共同研究です。

高取町では2021年度に3地区の住民及び他出した地区出身者を対象に質問紙調査を行いました。この3地区はいずれも比較的近くに医療機関があるものの買い物先が離れています。車が運転できる間はよいのですが、車が運転できなくなると買い物や医療アクセスが困難になるため、多くの方が不安を感じています。またこれらの地区の出身者は結婚のタイミングで他出しますが、その約7割は県内に居住し、比較的頻繁に帰省しています。そのため地区の高齢者住民にとって緊急時は安心なのですが、実家に帰郷することはないので、車が運転できなくなる10年後を考えると不安が募ります。そこで2022年度はこうした調査の成果を地域住民と共有するために6回のワークショップを実施し、地区の将来についてディスカッションを行いました。その結果、今年度末から次年度に向けて、軽スポーツ（ボッチャ）による多世代交流と地区間交流を図ることになりました。



高取町での調査の様子

下北山村では2021年度には、住民基本台帳の個票に遡った分析、下北山中学校卒業生名簿及び各種公的統計の分析を行い、Uターン・Iターンのメカニズムを明らかにしました。これらの成果は2022年度、村が「地域のハブとなる交流拠点を共創する」ことを目的として村内外の若者を集めて実施した「下北山アイデア村」ワークショップで共有され、ディスカッションのベースとして活用されました。また地域住民のソーシャル・サポート・ネットワークを明らかにし、コミュニティの持続可能性を見通すために、2つのインタビュー調査を実施しました。1つは地域の高齢者を見守る保健師・看護師他医療関係者6名へのコミュニティ・キーパーソン・インタビュー、もう1つは村内3地区の80代高齢者12名に対するフォーカス・グループ・インタビューです。これらの調査は次年度も継続することが決まっており、村が立案する「下北山村地方創生総合戦略」の改訂版に活用されることになっています。



下北山村でのインタビューの様子

## なら なら学研究会活動報告【磯部 敦】

### ■なら学研究会 公開研究会

なら学研究会では、「なら」の研究、および「なら」を研究してきた人びとの再評価をおこなうべく、2022年度は3回の公開研究会を開催しました。いずれもオンラインでの開催です。

#### 第34回研究会

【日時】2022年9月11日

【講演】吉野の山村と私の研究——十津川村を中心に

【講師】岡橋 秀典氏（奈良大学教授、人文地理学）

#### 第35回研究会

【日時】2022年11月13日

【講演】幕末の奈良まちに生まれた奇豪：宇宙庵 吉村長慶

【講師】安達 正興氏（文筆家）

#### 第36回研究会

【日時】2023年2月5日

【講演】奈良の地誌研究における、最新の判明事項と研究の諸問題

【講師】大塚 恒平氏（Code for History 代表）



研究会風景

研究会等の告知、および開催後の印象記など詳細については、なら学研究会ウェブサイトで公開しています (<http://narastudies.hateblo.jp/>)。ご参照ください。

■資料の調査・撮影

今年度は、

- (1) 花岡大学旧蔵資料の調査と撮影
- (2) 前登志夫旧蔵資料の調査

を行いました。(1)は、大淀町佐名伝所在の浄迎寺ご所蔵資料。同寺の住職もつとめた児童文学作家の花岡大学が所蔵していた書簡類を拝借し、撮影と整理を行いました。(2)は吉野下市に生まれた詩人・歌人の前登志夫の生家を訪問し、旧蔵資料の調査を行いました。前登志夫自筆書き込みのある年譜については、撮影ののち『なら学研究報告』誌上で公開しました。また、拝借した創作ノートは次年度以降に撮影を開始する予定です。

このほか、畷傍高等学校を訪問し、旧制中学時代の資料を拝見しました。現在は工事のため資料室は閉鎖となっておりますが、開室後、あらためて調査を行う予定です。

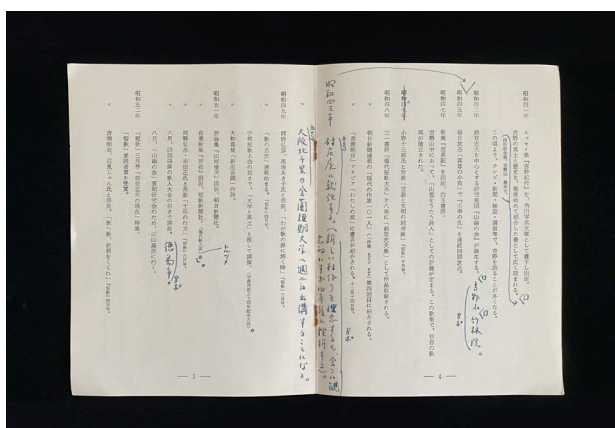
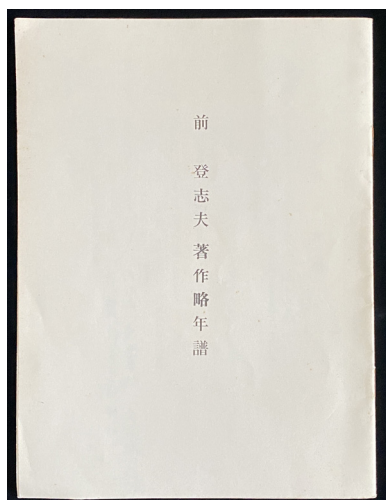
調査や撮影についても、なら学研究会ウェブサイトで公開しています (<http://narastudies.hateblo.jp/>)。ご参照ください。



前登志夫邸



前登志夫邸



前登志夫氏の資料

■『なら学研究報告』

『なら学研究報告』は、オンラインで発行している大和・紀伊半島学研究所なら学研究センターの紀要です。今年度は、

- ・「【資料紹介】『前登志夫著作略年譜』（前登志夫自筆書き入れ）」（『なら学研究報告』9、2022年11月）  
磯部 敦・寺岡 伸悟
- ・「【資料紹介】横田俊一宛前登志夫書簡十四通」（『なら学研究報告』10、2022年11月）  
磯部 敦・佐藤 さくら・加治屋 初弥・西谷 明日花・猫本 明花

を公開しました。いずれも奈良女子大学学術情報センターのリポジトリで公開しています。ご参照ください。

## 共生 共生科学研究センター 施設・機器の共同利用案内【川根 昌子】

共生科学研究センターは、北魚屋東町のコラボレーションセンターに共通実験室（Z108室）と生物育成室（Z109室）を備えているほか、東吉野村にある大和・紀伊半島学研究所分室（旧四郷小学校）の管理・運営も行っています。

今年度から、共生科学研究センター HP に「施設共同利用」ページを追加しました（[http://www.nara-wu.ac.jp/kyousei/open\\_use.html](http://www.nara-wu.ac.jp/kyousei/open_use.html)）。このページから、施設や機器の閲覧・予約、貸出機器類リストの閲覧・予約が可能です。また、東吉野村分室利用申請書のダウンロードが可能です。

今年度は貸出機器に、気孔コンダクタンス測定装置や真空検体乾燥機、マイクロスライサー等が追加されました。ぜひご利用ください。

これらの利用については年2回程度、センター HP や職員掲示板を通じて利用者募集を行い、説明会を開催いたしますが、年度途中でもご興味のある方は共生科学研究センター事務室までメールにてお問合せください（[kyousei.nwu@gmail.com](mailto:kyousei.nwu@gmail.com)）。多くの皆様にセンターの施設・機器類を利用していただければ幸いです。



気孔コンダクタンス測定装置



真空検体乾燥器



フラクションコレクター



マイクロスライサー

## 共生 2022年度 野外体験実習報告【酒井 敦】

2022年8月21日（日）に東吉野村で野外体験実習を行いました。今年は、小中学生14名、保護者10名にご参加をいただき、スタッフ12名を加え、総勢36名で実習を行いました。

屋外用には(1)「川の生きものを採集・観察してみよう！～どんな場所にどんな生き物がいるかな？～」、室内用には(2)「シャボン玉の秘密にせまる！～シャボン玉を上手に安全につくるにはどうしたらいいかな？～」の2つの実習を用意しました。

(1)の川の生き物観察は、実際に川に入って観察や採集を行ってもらう予定でしたが、前夜の雨で川の水かさが増しており、残念ながら屋外での採集・観察はできませんでした。その代わりに、スタッフが採集してきた水生昆虫や魚を室内で観察・分類してもらい、川の中には流れの速い瀬と流れの遅い淵があること、瀬と淵ができるのは川が曲がっているからであること、瀬と淵ではそこに生活する生き物が異なり、どちらの環境も多様な生き物を育むためには大事であることなどを学びました。

(2)のシャボン玉実験では、シャボン玉ができるしくみやシャボン玉を作るのに必要な界面活性剤の性質について学んだあと、界面活性剤として市販の台所用中性洗剤を用いて実際にシャボン玉を作ってみました。次に、砂糖や洗濯のり、化粧水などを入れての丈夫なシャボン玉づくりに挑戦したり、大きなシャボン玉づくり、水中シャボン玉づくり、ドライアイスを使った浮かぶシャボン玉実験などに挑戦したりしました。参加者の皆さんはそれぞれ工夫しながら、いろいろなシャボン玉づくりを楽しんでいました。

天候はさほど悪くなかったものの前夜の雨で川に入ることができなかったのは残念でしたが、整備を進めていた実験講義室を活用し、落ち着いて川の生き物観察ができたのはよかったですと思います。参加者の皆さんからも好意的なコメントをたくさんいただき、スタッフ一同ほっといたしました。

昨年度に続き、今年度も秋にもう一度、東吉野村野外体験実習（森林関係）を行う予定でしたが、台風の影響により中止にせざるを得ませんでした。来年度は、夏休み期間に2回実施し、多くの方に参加していただきたいと計画を進めております。職員掲示板や共生科学研究センターホームページ等で随時お知らせいたしますので、機会がありましたら是非ご参加ください。



川虫の観察



東吉野村分室



シャボン玉実験



## 古代 第18回若手研究者支援プログラムの報告【奥村 和美】

2022年度第18回「若手研究者支援プログラム」を、8月27日（土）に、オンライン（zoomを使用）にて開催しました。今回も、科学研究費基盤研究B「敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の展開」（代表：信州大学 西一夫氏）・同基盤研究C「歌における説話的意匠の形成」（代表：淑徳大学 白井伊津子氏）より共催を得ました。講師の方々に、奈良女子大学の会場本部にお集まりいただき、そこでの御講演の様子をオンラインにて配信させていただきました。

今回のテーマも、引き続き「萬葉集巻十六を読む II」です。現在、故芳賀紀雄氏の遺志を継ぎ、『萬葉集全注巻第十六』（有斐）の早期刊行を目指して、鋭意、注釈が進められています。その注釈メンバーの中から国語学分野では佐野宏氏、国文学分野では内田賢徳氏、そして外部から中国文学・比較文学分野で、金文京氏に講師をお願いし、それぞれのご専門の立場から巻十六やそれに関わる諸問題についてお話しいただきました。なお、各講演の後に、あらかじめ指名した若手研究者数名に質問をしていただき、質疑応答を通してさらに考察を深めました。会場本部に講師の先生方と主催・共催の主要メンバーが集まったことで活発な議論が展開されました。75名の参加でした。

日時：令和4年8月27日（土） 10時30分～17時

講演：「字音語」と仮名

講師：京都大学大学院教授 佐野 宏

歌と語り——巻十六の場

講師：京都大学名誉教授 内田 賢徳

中国文学より見た『万葉集』巻十六

講師：京都大学名誉教授 金 文京

司会：奈良女子大学教授 奥村 和美

## 古代 再開しつつある国際的共同研究【中澤 隆】

コロナ禍は年末・年始にかけてついに第8波に突入してしまいました。それでも学内の警戒レベルは少しずつ緩くなり、最近では外国人研究者の来訪が増えてきました。環境歴史分野では本年度から韓国・釜山大学の林志暎博士との共同研究が始まりました。研究課題は4世紀に造成したものと推定されているチョクセム44号墳（慶州・皇吾洞）から出土した馬具に使われていた革の素材となった動物種を、残存するコラーゲンの質量分析により同定することです。資料はこれまでに研究対象としてきた新石器時代や旧石器時代の骨よりも、今から約1,500年前とかなり新しいのですが、革は馬具に使われていた金具の錆や土のような粉末にまみれていて全く原型をとどめていませんでした（図1）。

分析を依頼された6検体のサンプルのうち比較的量の多い3検体それぞれ約15mgから抽出できたコラーゲンの量は非常にわずかで、自動解析ソフトウェアでは動物種の判定に必要なアミノ酸配列解析ができませんでした。そこでやむを得ず動物の候補をウシ、シカ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、イヌ（可能性が低いのでのちに対象から除外）に絞って昨年来慣れていた手動によるスペクトルの解析を行いました。現在、候補の中からウマ、ヒツジとヤギの可能性を否定することができて、残る候補がほぼウシとシカに絞られ、一つのサンプルはウシ由来と推定する段階に達しています。この結果を確認するためにはもう少し資料の量を増やし、試料の調製方法を改良しなければなりません。

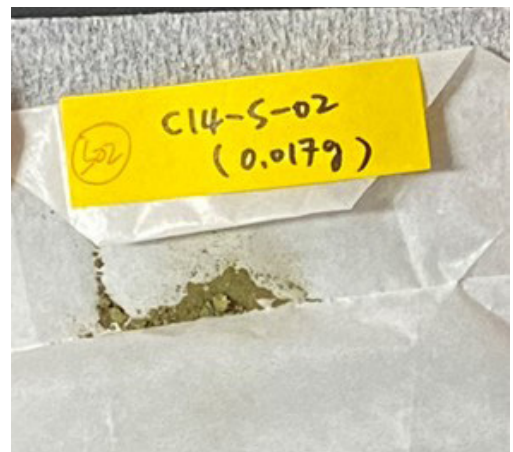
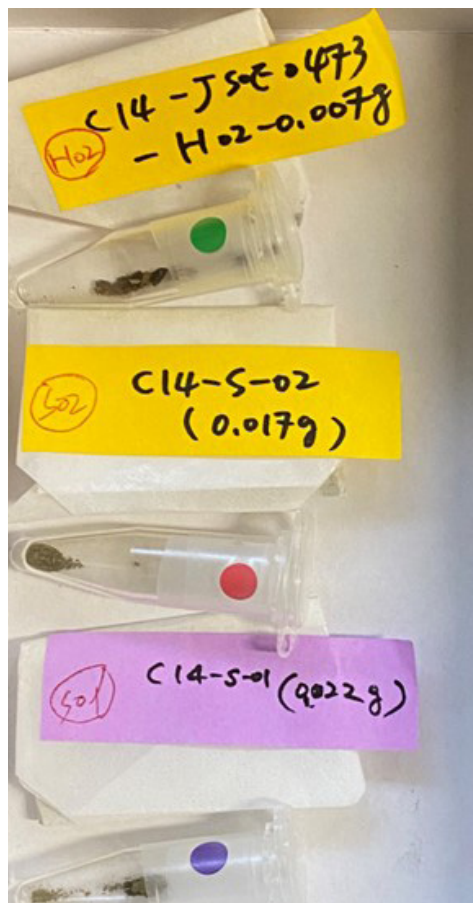


図1 チョクセム44号墳出土の「革」試料

令和3年度の本ニューズレターで紹介したように、7世紀末頃の矢本横穴墓群（宮城県東松島市）から出土した遺物について行った元興寺文化財研究所との共同研究の結果、官人の革帯にウシの皮が使われていることが明らかになり、本年度には学会でも発表しました（山口繁生ら「矢本横穴出土鍔帯の自然科学分析」日本文化財科学会第39回大会、2022年9月11日）。5世紀の朝鮮半島の新羅で使われていた馬具の帯と7世紀末頃の東北地方の官人の革帯に同じウシ皮が使われていたとすれば、その理由が知りたくなります。分析例を増やせば古代の朝鮮半島と日本（倭国）との文化・技術交流の一端が窺えるかもしれません。

国際的な共同研究としては、国立民族学博物館（大阪府吹田市）の外来研究員 Clara Boulanger 博士との琉球や東南アジアの遺跡から発掘された魚類の同定をテーマとする研究があります。Boulanger 博士は1月末に小雪が散らつく中を沖縄の貝塚遺跡で採集した魚の骨資料を持参されました。現在そのうち本土の縄文時代頃の資料を選んで分析を始めています。火山国で酸性土壌の日本では骨が溶けやすいため、墓以外の遺跡から動物の骨が出土することは珍しいのですが、貝塚は貝殻に含まれる炭酸カルシウムで土壌の酸が中和されるので、比較的小さな魚の骨でも採集できるようです。

このほか、名古屋大学博物館の門脇誠二教授との共同研究は今年で7年目になります。コロナ禍により海外での発掘調査ができなかったのですが、昨年夏に約3年ぶりにヨルダンの旧石器時代の遺跡で発掘調査が実施できたそうです。その出土資料の一部は既に分析を始めていて、来年度は沖縄の魚の骨と加えて分析が忙しくなりそうです。ようやくコロナ禍も終わりが見えてきたような気がします。



チョコセム44号墳出土の「革」試料

## 古代 2021年度聖地学シンポジウムの報告【西谷地 晴美】

「聖地の場—フランスと日本—」をテーマとした2021年度聖地学シンポジウムを、2022年3月29日14時からZoomで開催しました。日常空間とは意識的に区別され、設けられた“場所”を聖地と捉え、フランスの事例と日本の事例から、聖地を作ることが人間にとってどんな意味をもつのかを考える企画です。シンポジウムでは、奈良女子大学博士研究員の野口理恵氏が「19世紀フランスにおける聖母の出現—パリを中心に—」を、奈良女子大学特任助教の斉藤恵美氏が「熊野信仰の全国分布—東日本編—」を報告し、センター員の西谷地晴美氏がコメントを付しました。参加者は13名でした。

テーマ：聖地の場—フランスと日本—

日時：2022年3月29日（火）

講演：熊野信仰の全国分布—東日本編—

講師：奈良女子大学特任助教 斉藤 恵美

19世紀フランスにおける聖母の出現—パリを中心に—

講師：奈良女子大学博士研究員 野口 理恵

コメンテーター：奈良女子大学教授 西谷地 晴美

## 研究所の活動状況（2022年度）

### シンポジウム等

#### ◎聖地学シンポジウム

【テーマ】 聖地の場—フランスと日本—

【日 時】 2022年3月29日（火） 【場 所】 オンラインにて開催

【講 演】 「19世紀フランスにおける聖母の出現—パリを中心に—」

野口 理恵（奈良女子大学博士研究員）

「熊野信仰の全国分布—東日本編—」 齊藤 恵美（奈良女子大学特任助教）

コメンテーター：西谷内 晴美（奈良女子大学教授）

#### ◎第18回若手研究者支援プログラム（古代）

【日 時】 2022年8月27日（土） 【場 所】 オンラインにて開催

【講 演】 「「字音語」と仮名」 佐野 宏（京都大学大学院教授）

「歌と語り—巻十六の場」 内田 賢徳（京都大学名誉教授）

「中国文学より見た『万葉集』巻十六」 金 文京（京都大学名誉教授）

司 会：奥村 和美（奈良女子大学教授）

#### ◎森と水の源流館×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウム

##### 第22回共生科学研究センターシンポジウム

【テーマ】 樹と水と人の共生を未来へつなぐ

【日 時】 2022年11月23日（水・祝）

【場 所】 川上村（主講演会場）、奈良女子大学・東吉野村（一般視聴会場）

【講 演】

基調講演 「吉野林業—森林と人間のかかわりの極致」

泉 英二（愛媛大学名誉教授、吉野林業研究家）

視点提供1 「川上村・水源地の森の自然環境」

横田 岳人（龍谷大学先端理工学部准教授、公益財団法人吉野川紀の川源流物語理事）

視点提供2 「地域の自然と経済を活かせる人づくり」

中澤 静男（奈良教育大学ESD・SDGsセンター長）

視点提供3 「川上宣言×SDGsシンポジウム『樹と水と人の共生を未来へつなぐ』に寄せて」

宮口 侗迪（早稲田大学名誉教授、公益財団法人吉野川紀の川源流物語理事）

コメンテーター：高田 将志（奈良女子大学教授）

酒井 敦（奈良女子大学 共生科学研究センター長）

統括：寺岡 伸悟（奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所長）

前迫 ゆり（大阪産業大学・紀伊半島研究会会長）

### センター主催研究会・セミナー

#### ◎古代学・聖地学研究センター 研究会（古代）

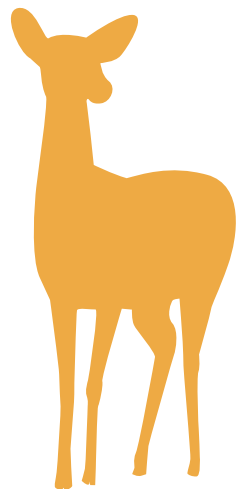
【日時】 2022年3月29日（火） 【場所】 S327

講演 「「山伏」の歴史の変遷—色彩表現を中心に—」 小菅 真奈（大学院博士後期課程）

#### ◎第34回なら学研究会（なら）

【日時】 2022年9月11日（日） 【場所】 オンラインにて開催

講演 「吉野の山村と私の研究—十津川村を中心に—」 岡橋 秀典氏（奈良大学教授）



- ◎ 2022 年度第 1 回（通算第 28 回）共生科学研究センターセミナー（共生）  
【日時】2022 年 9 月 27 日（火） 【場所】G302（学内限定オンライン開催）  
話題提供 「カーボンニュートラル達成に向けての動向と今後の取り組みに関して」  
村松 加奈子（共生科学研究センター、研究院自然科学系）  
話題提供 「カーボンニュートラル（CN）関連活動の話題提供」  
瀬戸 蘭美（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
- ◎第 35 回なら学研究会（なら）  
【日時】2022 年 11 月 13 日（日） 【場所】オンラインにて開催  
講演 「幕末の奈良まちに生まれた奇豪：宇宙庵 吉村長慶」 安達 正興氏（文筆家）
- ◎ 2022 年度第 2 回（通算 29 回）共生科学研究センターセミナー（共生）  
【日時】2022 年 11 月 18 日（金） 【場所】オンラインにて開催  
ショートトーク 「今年度の東吉野村野外体験実習について（報告）」  
酒井 敦（共生科学研究センター、研究院自然科学系）  
ショートトーク 「奈良エクステンションについて」  
寺岡 伸悟（大和・紀伊半島学研究所、奈良カレッジズ連携推進センター、  
研究院人文科学系）  
ショートトーク 「Molecular Design for Cadmium-Specific Fluorescent Sensors」  
三方 裕司（共生科学研究センター、研究院工学系）  
主講演 「バングラデシュにおける水害と稲作」 浅田 晴久（研究院人文科学系）
- ◎第 36 回なら学研究会（なら）  
【日時】2023 年 2 月 5 日（日） 【場所】オンラインにて開催  
講演 「奈良の地誌研究における、最新の判明事項と研究の諸問題」  
大塚 恒平氏（Code for History 代表）
- ◎ 2022 年度第 3 回（通算 30 回）共生科学研究センターセミナー（共生）  
【日時】2023 年 3 月 10 日（金） 【場所】オンラインにて開催  
講演 1 「大気圧イオン化イオン移動度分析法による気相有機イオンの生成過程の研究  
～微生物由来揮発性代謝物質および呼気物質分析法開発へのアプローチ～」  
竹内 孝江（共生科学研究センター、研究院自然科学系）  
講演 2 「根粒菌のゲノム編集に向けて」 佐伯 和彦（共生科学研究センター、研究院自然科学系）

#### 開講科目

- ◎共生科学（共生）
- ◎共生科学特別演習（共生）
- ◎歴史学実習（古代）
- ◎なら学（なら）
- ◎なら学演習（なら）
- ◎共生科学セミナー（共生）
- ◎地域社会の課題演習（共生）
- ◎「奈良」女子大学入門（古代）
- ◎なら学+（なら）
- ◎なら学フィールドワーク実習（なら）

#### 地域貢献事業

- ◎小中学生対象「野外体験実習（夏）」（共生） 【日時】2022 年 8 月 21 日（日） 【場所】東吉野村

#### 編集後記

2022（令和 4）年度も、ニュースレターをお届けします。今年度は、研究所の各センターが要項を作成しました。各センターのこれまでの活動状況が一覧できる冊子ができたことは、これから研究所として、夢を共有して進んでいこうとするこの時点において、まずそれぞれが蓄積してきた「知的財産」を整理し、2023 年度以降のさらなる飛躍へとつながる契機となると思います。これから私たちは「流域」に着目した総合的な学びを構想する場をめざします。皆様の一層のご支援をお願いいたします。（寺岡）

制作発行 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所  
編集者 狩俣 順也 川根 昌子  
槌谷 けい子 寺岡 伸悟  
連絡先 〒630-8506 奈良市北魚屋東町  
Tel 0742-20-3762  
担当事務 研究協力課  
U R L <http://www.nara-wu.ac.jp/kyi>  
e - m a i l ky-i@cc.nara-wu.ac.jp

